

特定非営利活動法人(国税庁認定)
柔道教育ソリダリティー

第6回講演会

「ロシアの政治リーダー」
プーチンとメドヴェージェフの手法
と柔道

小林和男

2009年6月23日(火)

於 東海大学校友会館隣ケ関ビル 33階



みなさん、こんにちは。小林和男です。本日は、お招きいただきありがとうございます。ごさいます。

柔道を全く知らない私が、ロシアのプーチンが柔道をやることを縁に山下泰裕先生とお近づきになり、お知恵を拝借して『プーチンと柔道の心(朝日新聞出版)』という本を出版しました。

日本では、プーチンというと「KGB出

身の嫌なヤツ」と思われがちです。が、実際のプーチンはそんなことはなく、多くの日本人が知らない彼の側面を知ってもらいたいと、山下先生とも常々話していました。そうでない、我々にとつても不幸なことだからです。

さて、プーチンのことはともかくとして、皆さんはロシアについても「とんでもなく嫌なところ」とのイメージをお持ちではないでしょうか。

今、会場から「そんなことはないですよ」との声をいただきましたが、その声はここでは少数派でないとする、これはとんだところへ来てしまったようですね(笑)。このような場所では、中には一人くらいロシアに興味がある方がいらつしやるとしても、たいていの場合、9割9分の方が「ロシアという国は嫌だね」というのが例外的なところでは、これは、特別な場所のようですね。これはこれでうれしいことです。

誤解されがちなロシアのイメージ

今日は柔道を離れて、ロシアという国をどう考えていたらいのか、私の考えを述べてその一端をお話したいと思えます。ひよつとして皆さんの目から多少はウロコを落としていただき、ロシア観を少し変えていただければ、こちらに伺った意味があると思っています。

何を申し上げたいかと言うと、まずは、

プーチンは今、ロシアで非常に高い支持率を得ていて、その後任であるメドヴェージェフ大統領も相当な支持率を得ているという事実です。

皆さんの中には、「メドヴェージェフ大統領はプーチンの傀儡だ」と思っている方が多いと思います。ほとんどの方が、43歳の若いメドヴェージェフ大統領の後ろで、プーチンがマリオネットの糸を操っているというふうにいるでしょう。

今、会場からも「そうじゃないのですか?」と声が上がりました。これでしょうか? 今日の話が軌道に乗ります(笑)。

では、実際のところはどのようなのでしょうか。私は先々週、アイスランドのレイキャビクから帰って来ました。レイキャビクは、1986年10月に当時のゴルバチョフ大統領とレーガン大統領の首脳会談があり、そこから冷戦終結の話合いが続くことになった場所です。

ちよつとここで自慢話をさせていただきますと、実は決裂していた会談で、ゴルバチョフ大統領から「これが新しい対話のスタートだ」という言葉を引き出したのは、他でもない私なのです。これは記録が残っていて、当時の「NHKスペシャル」にも、その言葉を使いました。

私がレイキャビクを訪問したのは、今年が冷戦終結から20年目に当たるからです。

1986年10月1日に始まった対話が、1989年12月1日、地中海のマルタ島で、今度はゴルバチョフ大統領とブッシュパ(第41代アメリカ合衆国大統領)が会談し、そこで冷戦の終結を確認しました。

そこで、20年後の現在はどうなっているのか。今回レイキャビク行きは、それを見たいという私のセンチメンタルな思いで、いわば心の底にある、私自身の誇りの確認に出かけた旅だったというわけです。

実は、その冷戦の終結が、プーチンが院政を布いて。現在のメドヴェージェフ大統領政権があるということと関係しています。それがいかなる関係かは、後程お話ししたいと思います。

現在と将来のロシアを知るために

今のロシア、また近い将来のロシアを考へる時には、プーチンの手法ややり方、手口を分析することがどうしても欠かせません。なぜかと言うと、プーチンが8年間にわたって大統領をやり、その間にメドヴェージェフという就任当時はまだ42歳だった若者を後継者に任命し、強力な支持を見せることで現在の政権があるからです。

プーチンの後押しで大統領になったメドヴェージェフは、いわばロシアの熊さんのような存在です。山下先生が参加できなかったモスクワオリンピックのマスコツ

トは、ミレーシャという熊でしたが、そのことからも分かるように、ロシアで熊はたいへん人気のある動物です。

そのメドヴェージェフは昨年5月に大統領に就任し、第一声として「プーチン元大統領の政策路線をそのまま踏襲すること表明しました。これは彼の宣言であり、公的な約束です。そう考えると、プーチンが院政を布いているかどうかはともかくとして、これからのロシアを考える上で分析しなくてはならないのは、プーチンが8年間でやってきたことと、その手法や手口なのだとということがお分かりになるでしょう。

つまり、現在のロシアを見るだけではなく、将来、ロシアがどこに向かって行くのかを知るためにも、プーチンのやり方を知らなくてはなりません。まずは、そこから話に入りたいと思います。

プーチンが支持される理由

日本では朝日新聞などがプーチンのことを「人殺し」だとか女性とのスキャンダルを取りざたして、ずいぶん人気がないようですが、ご存じの通りロシアでは8年間の在任中で支持率が60パーセント以下に下がったことはありません。現在も首相として75パーセントの支持率を得ています。

ここで会場のご婦人に伺いますが、政治家を選ぶ時には何を基準にするでし

よう。

今、戸惑っていらつしやいますね。すぐに答えられないことで分かるように、日本人は本当に幸せなのですよ。それはなぜか。たぶん皆さんは政治家を選ぶ時に、「麻生さんじゃだめだ、小沢さんでもどうか、鳩山さんでもたいしたことはないよ」と言いながら、さほど心配していないのではないのでしょうか。それが、「さて、何で選びましょうかねえ」という言葉になる。皆さんが非常に安全で豊かな生活にどっぷり浸かっているという証拠です。日本人の大多数がそうなのです。

こんな話をした後にはあらためて「何を前提に政治家を選ぶか」と問うと、今度は「信念とかフィロソフィ」といった言葉が出てきます。これもまた、幸せな証拠です。

それでは、エリツインが大統領だったあの混乱した時代のロシアにいた人々に「政治家を何で選ぶか」と聞いてみれば、何と答えるのでしょうか。経済はどん底で、物もない。その時に何を基準にするか。すると「自分の暮らしを豊かにしてくれる人、生活を安定させてくれる人」と答えるでしょう。

プーチンがなぜ人気があるのかといえは、ひとえにそこなのです。自分たちの懐を豊かにし、生活を安定させてくれた、というのが彼の人気の秘密です。そこが分からないと、朝日新聞やNHKの

番組のようにプーチンを「人殺し」だとか「強権政治で人気を高めている」と見るようになってしまっているのです。

私も経済の混乱期にロシアで暮らししたので、どれほどロシア人が経済的・政治的な安定を求めたか、ロシア人と同じく痛いほど分かります。だからプーチンがなぜ人気があるのかがよく分かります。

それは、つまり暮らしを豊かにしてくれたということなのです。

驚異的な経済の伸び

今日はあまり時間がありませんから、短く端折ってお話しましょう。

プーチンの8年間の治世に、具体的に何が起ったか。

毎年、実質賃金が10数パーセントから20数パーセントも上がったのです。日本の春闘では100円上げるのにも大変です。それなのに、2004年には6パーセントに落ち込んだこともあったにせよ、それを加味しても実質平均で14パーセントの伸びでした。

個人の懐が豊かになれば、それは良い政治家でしょう。

もうひとつは、国の懐はどうかということ。みなさん、ご存じの外貨準備高というのがありますが、現在、世界で一番、外貨を持っているのは中国です。2番は日本で、3番が今はロシアです。

ところが、今から9年前にプーチンが大統領に就任した時には、外貨準備高は私の財布と同じ。「ほとんど入っていない」という状態でした(笑)。

大統領就任の2000年5月の時点で、たったの100億ドルです。あの石油大国・資源大国であり、1億4000万人の人口を抱えているロシアが、たった100億ドルしか外貨準備を持っていない、つまりは財布の底は、殆んど何も無い状態だったのです。

それが、プーチン大統領の時代にどれだけ国が豊かになったかという、8年を経て彼が引退する時に外貨準備高は56倍の5600億ドルになっていました。このように国の懐も個人の懐も豊かになったとなれば、「私はこの人を支持する」となるでしょう。

ドイツからの債務を減らす

ここで問題になるのが、いかなる方法や手口で彼は個人の懐を豊かにし、国の財政を豊かにしたのかということ。2つの特徴があります。

まず、国際情勢を実に巧みに利用して国益のために使うということです。これでは抽象的ですから、具体的にひとつの例をお話しましょう。

政権を執って2年目くらいになると、誰でも「これだけのことができる」ということを示して支持を仰ぎます。アメリカカ

の中間選挙はまさにそういうことですが、ロシアでも同じです。プーチンも政権を執つて2年後に、ドイツに乗り込みました。時の首相はシュレーダーで、その時の首脳会談のテーマは何だったかという点、債務の返済交渉でした。

ソビエト連邦は15の共和国から成っていましたが、連邦が崩壊した時にロシアは全ての権利と義務を継承しました。貸した金も借りた金も継承したわけですが、もちろん、借りた金の方が多かったです。2000年の段階で債務は200億ドルをはるかに超えていましたが、中でも一番多かったのがドイツからの債務で、2002年の段階で65億ドルありました。今のロシアから考えればたいした金額ではありませんが、当時では相当なものです。

そこで返済を有利に進めるために、プーチンはドイツに出かけて行つたのです。プーチンは、シュレーダーとの一度きりの首脳交渉で辣腕を振りました。さて、どれくらいの債務を減らせば辣腕と言えるのでしょうか。

いま、会場からは「半分に減らせば」という声がありましたが、たった一度の首脳会談で半分にするとは、あまりに阿漕ではないですか？ とところが、実際にプーチンは一度きりの首脳会談で、借金を65億ドルから3億5000万ドルという実に18分の1に減らしたのです。

一体、どうすればそんなことができるのでしょうか。会場からは「交換条件として石油などの資源提供」との声が聞こえました。実務をやつていらつしやる方は、やはりピツタリ来ますね。その通りです。ただし、彼は資源を取り引きする時に国際情勢を利用しました。

2002年の段階で世界中が注目していたことは何だったか。

それは、テロですよ。2001年9月11日に世界同時多発テロが起こり、「タリバンをやつつける」という名目でロシアを含めた世界各国がアフガニスタンを攻撃しました。これは、当時のアメリカのブッシュ大統領が音頭を執つたわけですが、それに乗じてブッシュは何を始めたか。

小モノがリーダーになると実際に困るのですが、ブッシュ大統領は父親のブッシュが1991年の湾岸戦争でできなかったイラク攻撃をやろうとしたのです。

それにイギリスは乗りましたが、フランスのシラク大統領やドイツのシュレーダー首相、そしてロシアのプーチン大統領は猛烈に反対しました。彼らは「テロとイラクがどう結び付くのか。仮に大量殺戮兵器があるのなら国連の査察に任せ、その後にやればいい」と主張しました。それでもブッシュ大統領はラムズフェルド国防長官や Cheney 副大統領といったあたかも死神みたいな人たちに煽られて、イラク攻撃に邁進していったのです。

2002年4月の段階で、イラクへの攻撃がもう避けられない状態であること、プーチン大統領は知っていました。ドイツのシュレーダー首相も、承知していた。首脳会談では当然、これが話題になります。「シュレーダーさん、困つたものですね。ブッシュさんは何が何でもイラクを攻撃しようとしている」というわけです。イラクを攻撃すれば、中東情勢が不安定になる。中東情勢が不安定になれば、エネルギーの安定的な供給に不安が生じ、価格が高騰します。ドイツには石油も天然ガスもありません。そこで「シュレーダーさん、お困りでしょう。でもご安心下さい。私のところにはいくらでも石油や天然ガスが豊富にあります。アメリカがイラクを攻撃しても、我がロシアからドイツにエネルギーを安定的に供給することを約束しましょう」。そして、「ところで本日はお返ししなくてはならない額について、現在、手元が不如意で・・・」というわけです。

まるで見て来たように言っていますが、だいたいこんなふうにしてプーチン大統領は2002年4月14日、ただ一度の首脳会談で65億ドルの債務を3億5000万ドルという18分の1にまで減らすことに成功しました。

ドイツがなぜそれを受け入れたか。当時のシュレーダー首相の国民に対する発言はとても印象的でした。「返してもら

えるかどうか分からない債権にこだわるより、我々ドイツ国民は将来のことを考えようではないか。それはつまり、安定的にエネルギーが入ってくるということ。シュレーダー首相は国民を説得し、議会の承認を得て、65億ドルの債務をたった3億5000万ドルにまで減らしたのです。

国際情勢を国益のために利用する

「人が弱っているところにつけ込んで借金をチャラにするなんて、汚いぞ」と、日本的な潔癖さからすればそのように考えることもあるでしょうが、国民の立場になれば、汗水たらして働いて返さなければならぬ借金が、親分がちよつと交渉に行つただけで18分の1になつたので、彼の出身がKGBだろうが何だろうが、それは良い大統領なのです。政治は実績だという証拠です。

翌2003年3月20日にアメリカはイラク攻撃を開始します。その前の原油の値段がいくらだったか、覚えていませんか？ 喉元過ぎれば熱さを忘れてしまふように皆さんはもう忘れてしまつて、20ドル台ですよ。それがプーチンやシュレーダーの予測通りにどんどん上がつて、ついに去年の145ドルという頂点になつたということです。

もう一つ言えば、石油や天然ガスの高騰がロシアの国益となり、懐を豊かにし

たということ、これはブッシュの誤算というか、計算しなかったところでしょう。

今の話は、「プーチンの手法は、国際情勢を巧みに国益のために使うこと」ということです。では、日本の場合はどうでしょう。考えてみれば、日本の場合は国際情勢に利用されて金を払う。アフガニスタンでもイラクでも湾岸紛争でもそうです。

それと逆に、国際情勢を国益のためにうまく使うというのがプーチンのやり方です。これは次の話に繋がりますので、頭の中に入れておいて下さい。

長い目で布石を打つ

プーチンのやり方の二つ目の大きな特徴は、極めて長い目で布石を打つことです。

今、起こっている現象を見ると、3〜4年前に彼がやったことを思い起こせば、「なるほど、こういうことだったのか」と思い当たります。

具体的な例を出してみよう。典型的なのは、エネルギーを国家の手に取り戻したことです。プーチンは大統領就任の時に、ひとつのメッセージを投げかけました。曰く「エネルギーという国の富に、どうして国が関わらないことがあるのか」。

どういう意味かといいますと、酔っ払い大統領だったエリツインの時代、2000

年頃には、ロシアの炭素エネルギーの90パーセントが、エリツインの家族たちと結び付いた政商たちの手に落ちていました。だから、いくら国が自分たちのために使おうと思っても、できなかったのです。特にユダヤ系の政商たちは国を信用していませんから、石油や天然ガスの販売で利益を得ても、ケイマン諸島やジブラルタルといったタックスヘイブンに流してしまいました。

普通なら当然のことながら儲かれば国の経済を活性化するのに役立つわけですが、そうはならなかった。だから、いくら資源が高騰し、それを売っても、国の経済を潤す血液にならなかったというのが、エリツイン時代の形態です。富はあったのです。その富が経済を活性化させなかった理由は、政商の手で独占され、国の経済を潤すことはなかったからなのです。

出身母体の利用

それが、プーチンが出てきた時に「資源に国が関与しないということがあるだろうか」と言ったのです。これはなかなか上手い言い方です。何を始めたかという、エネルギーを握っている人々たちをひとりずつ摘発していったのです。

その時にはどんな方法があるでしょうか。狙いを定めて政商の企業をやっつけるには、脱税を摘発するのです。その時

に活躍したのが、誰か。プーチンの出身を考えてみて下さい。彼は秘密警察の出身です。ここで彼の出身部隊が大いに活躍してその証拠を固め、ベレンフスキー、グシンスキー、そして2005年にはついにホドルコフスキーというロシアで一番のユコスという石油会社のトップを摘発しました。

やり方は相当ひどいですよ。治安国家にはあるまじきやり方もありますが、ロシア国民は大喝采だったのです。そして今、エネルギー関係は民間に握られた40パーセントをのぞき、ほぼ50パーセントを国家の手に取り戻したのです。

ですから、石油価格高騰の中でロシアが潤うのは当然です。プーチンのやり方は、このように非常に長い目で布石を打つのです。

天然ガスひとつとってみても同じです。1970年代からヨーロッパ全体の30パーセント近くをロシア一国が供給していました。天然ガスは暖房に欠かせません。それをロシア一国が供給していたわけですが、ロシアには弱みがありました。

それは、その天然ガスの80パーセントが、地図をご覧いただければ分かるようにウクライナを経由してヨーロッパに輸出されていたことです。

ウクライナは元々、ロシアとは兄弟国です。キリスト教の伝播ではむしろ本家筋にあたるようなところですが、199

1年にソビエト連邦が崩壊して独立します。仲が良かった時代はよかったです。2004年にユーシェンコという格好いい若手の政治家が登場し、「オレンジ革命」と称して「ロシアよりアメリカやEU、NATOに入る」とか言い出したために、ロシアは怒って「それはないだろう」ということになったのです。

天然ガスの供給ではドイツに1000立方メートルあたり200ドルほどで売っていたところ、ウクライナはロシアの兄弟国ですから、4分の1くらいの45ドル程度で供給していました。それがユーシェンコの登場によって、「それだったら国際価格並みに払ってくださいよ」となったのが、2005年12月のことでした。

ウクライナは貧乏でもとも払えませんが、そこで2006年1月1日に、70年代に建設されたパイプラインを初めて止めたというのが、あのエネルギー問題の発端なのです。

布石でできたノルドストリーム

「ロシアはエネルギー問題を政治に使う」と世界中から避難されましたが、その通りです。政治的に利用したのです。それはそうですよ。自分の国を非難しているところに、市場価格の4分の1でエネルギーを供給するなんてことは、どこだつてしないでしょう。

そうなるとヨーロッパが困るわけですが、

ちゃんとプーチンは長い目の布石でウクライナに対して圧力をかけていました。どうということか。プーチンはロシアに2005年にひとつの会社を設立します。出資者はガスプロムという世界一のガス会社です。先日プーチンが出席したパーティにもガスプロムの会長が影のように付いていましたね。

ガスプロムは、49パーセントをドイツのBASFが出資して残りの51パーセントを出資し、「ノルドストリーム(北の流れ)」という会社を設立しました。これはどういう会社かという点、地図を見ていただければ分かりますように、サンクトペテルブルクの北にあるバルト海沿いのヴィボルグという小さなフィンランド領だった港町から、海底に1200キロメートルのガスパイプラインを敷設して、旧東ドイツのグライフェスワルトという小さな港町に直接、ロシアの天然ガスを運び込むというガスパイプライン会社です。

つまり、ウクライナを経由せずにヨーロッパに天然ガスを運び込めるということ。ドイツと組んでやるという会社です。ウクライナに対して「いくら邪魔をしても無駄だよ」というわけです。

会社ですから会長をはじめ役員が重要です。それをいったい誰がやるのでしょうか。出資はロシアのガスプロムが51パーセント、ドイツのBASFが49パーセントの出資です。先ほど、「忘れないように」

と言ったのは、プーチンのやり方は「非常に長い目で布石を打つ」ということでしたよ。

この年の11月、ドイツで総選挙がありました。シュレーダーは圧勝することができず、後任を現在のメルケルに預けてあっさり引退してしまいました。その10日後に出来たのが、この会社なのです。そこで会長に就任したのが、シュレーダー前首相だったというわけです。

遡れば2年半前、65億を3億5000万ドルにするには、どう考えても裏がありますよね。今から考えればということではあります。そういうことじゃないですか。

だから、ロシアを読む時には今の時点ではなく少し前に遡って見ると、どれだけ長い目で布石が打たれているのかが分かるのです。

現在のロシアは、

腕のいい船長の操縦する大きな船

プーチンの手法は、一つ目が国際情勢を上手く利益のために使うこと。そして二つ目が、それを非常に長い目で布石を打って利益のために尽くすということ。その手腕が分かっていますから、信頼感がありますよ。

私は今回のレイキャビックへの旅で、ロシアのバラライカのクインテットの演奏を見ました。バラライカというとロシアの民族

楽器で、ひどく泥臭いイメージ。それにバイヤンというアコーディオンのような伝統的な楽器を組み合わせたアンサンブルなのですが、それがもうウィーンフィルの弦のような響きを出す、素晴らしい演奏だったのです。私は10数年もロシアに滞在しましたが、こんなに見事な演奏に出会ったことはありません。

その後、楽団のリーダーたちと話す機会がありました。長い時間、話し込みましたが、サプリーダーが言うには「私たちは1987年のゴルバチョフ改革の混乱期にアンサンブルを結成した」という。どうやって食い繋いできたかという点、小学校や幼稚園を訪問して演奏してきたというわけですが、「演奏の腕を磨き、レベルを向上することだけは諦めず心がけ、ロシア国宝級のアンサンブルになった」ということです。

その話を聞いて文化の底力を感じたとともに、「今の状況をどう考えるか」と聞いてみました。実に上手な表現をしたところに感じ入りました。

芸術家というのは、日本でも同じようにその時の政治状況に批判的な人が多いいものです。それを彼は「ものすごく大きな船に、ものすごく腕のいい立派な船長が乗っているというのが、今の私たちロシアの状況だ」と。支持率がものすごく高いのですから当然です。が、日本にいと今にも崩壊しそうな独裁国家みた

いな報道をされているから、そういうところは知ることでもできずによく分かりませんよ。

ゴルバチョフの油断に学ぶ

皆さんの疑問は、プーチンが43歳の若者、メドヴェージェフを据えて後ろで糸を引いているのではないか、ということですね。新聞を見れば「院政だ、強権政治だ、権力亡者だ」と書いてありますから、大部分の皆さんがそう思っているでしょう。

冒頭で申し上げましたが、今年がちょうど冷戦終結20年目にあたり、実はそのこととプーチンとメドヴェージェフのコンビは、関係があります。

冷戦終結を宣言したのは、十字軍の本拠地として知られた地中海マルタ島という小さな島です。1989年12月1日、ゴルバチョフとブツシュパ会談が行われました。その日は50年ぶりの大嵐で、崖の上にある会談場にも波しぶきがかかるひどい状況でした。私はそれを「神風が吹いた」と表現しました。なぜかというと、米ソの代表がお互いの船を訪問して交渉することになっていましたが、大嵐で船なんか使えない。そこで両首脳がロシアの軍艦に閉じ込められて、通常ならバカなジャーナリストが記者会見をやらせと慌ただしくなることもなく、じつくり話ができました。それであのマルタ島で

の冷戦終結宣言が出たからなのです。

ところが私は、マルタ島の会談での映像を見て腰を抜かしました。冷戦とはいえ、二つの体制の争いであり、それを終わらせる会談なのです。ロシア側からはゴルバチョフ大統領、シユルナゼ外相、ヤコブレフ補佐官の三人。いずれも軍人ではありません。一方、アメリカからはブッシュ大統領、シユルナゼのカウンターパートとしてベイカー國務長官、それに補佐官としてスコウクロフト安全保障問題担当首席補佐官という軍や治安機関を代表する人物が座っていたのです。

ロシア側には、冷戦とはいえ争いを終結させる場にも関わらず、軍の代表もKGBの代表もいなかったのを見て、私は本当に腰を抜かしたのです。「ゴルバチョフ、大丈夫か？」と。

ゴルバチョフには油断があったのです。もう改革も進み、軍は保守的で金食い虫だからそんな代表は必要ないという油断です。

ところが、軍も治安機関も力があります。力のあるものがないがしろにされるとどうするか。ロシアの歴史を見ても分かる通り、必ず悪さをする。

案の定、その会談から1年後の1991年8月19日に何が起こったか。その会談に出席できなかったKGBと治安機関と軍と共産党の古手が、反ゴルバチョフのクーデターを起こしたのです。

プーチンはその時までKGBのエージェントでした。ですから、組織内部でどういう不満が渦巻き、何が起きていたか、彼には実感としてよく分かっていた。クーデターが起きた時点で、彼はKGBを辞任しています。

治安機関や軍という力を持っているものがないがしろにされ、無視された時に何が起こるかを誰が一番よく知っているか。それはプーチン自身なのです。

メドヴェージェフの手腕

では、プーチンの役割とは何か。皆さん、メドヴェージェフを力のない大統領だと思っているでしょうが、決してそうではありません。

プーチンが2005年にまだ30代の若さだった彼を第一副首相に任命して、4つの課題を与えました。ロシア人が困っているのは、医療、粗製濫造で建築され老朽化して少子化問題にもつながる住宅、それに教育です。ソビエトが崩壊し、教育は減茶苦茶になりました。ロシアの富裕層で子弟をロシアで教育させている家庭はありません。みんなイギリスやスイスです。ちなみにロンドンにはロシアの富裕層が30万人もいるのです。

そして、その3つにロシアのアキレス腱と言われた農業を加えた4つの課題が、プーチンが「ロシアの4大国家プロジェクト」と称した難題です。それをプーチンは第

一副首相のメドヴェージェフに担当させ、3年間じっくり彼の行動を見ていたので、メドヴェージェフは普通なら逃げ出すような課題に対して、それなりの成果を示しました。

そして忘れてならないのは、メドヴェージェフはガスプロムの会長としてエネルギーの国家戦略を立てた内の一人だということ。ロシアの一番の収入源であるエネルギーの国家戦略を立てられる人物なのです。そして現実にロシアがエネルギーを制覇して、ガスプロムは2004年には日本円にして4兆円の純利益を上げられる会社になっていました。そういう会社の戦略を練った人物が、皆さんが考えておられるように「若いからヤワだ」という考え方は通用しないでしょう。メドヴェージェフは、単にプーチンが保護しているだけではなく、政治家として実績があるのです。

ただし私が見るところ、ひとつだけ弱みがある。彼にはプーチンのように軍や治安機関に足がかりがありません。彼は純粹に法律家として育っていますから、プーチンのようにKGBの中の人脈を知り尽くしているような人物ではない。

これはどういうことでしょうか。ロシアが現在のように豊かになった背景は、エネルギーを国の手に取り戻したことで、その手法は、脱税の摘発でひとつひとつ政商を潰していくというやり方です。

た。脱税で払えない資産を競売にかけ、政府系の企業が取得するというかなり強引なやり方ですが、そうやって国益を図ってきた。その時に活躍したのが、情報を集めて相手の弱みをちゃんと掴んだ治安機関です。

それが、政権が代わってプーチンが去り、若くて治安機関のことも知らず人脈もない人物が座ったとしたら、どうなるでしょう。1989年12月1日のマルタ島でのゴルバチョフとブッシュの会談を思い出してみて下さい。それは、不満になるでしょう。

そこでプーチンの役割とは何か。私が読み違えたのは、シユレーダーがガスプロムの会長になりましたから、プーチンも大統領を降りた後にはガスプロムに入ると邪推していました。2人で世界のエネルギー戦略を立てようということになると思っていたのです。ところが、プーチンは首相の座に就きました。

プーチンの本当の役割

これには驚きましたが、よく考えてみると、KGBを抑えるためにも軍を掌握するためにも、何らかの役職が必要で政府系とはいえ、ガスプロムという単なる民間の企業の代表では、それはできません。

プーチンが政権に残ったのは、メドヴェージェフという若い有能な青年にこれか

らのロシアの具体的な政策を託し、その間に不満を抱くであろう軍や治安機関を抑える働きをしていることだと私は考えています。

去年の5月7日にメドヴェージェフは大統領に就任しましたが、その直後に彼は赤の広場で大軍事パレードを行いました。その時の日本の新聞には、「力を誇示するプーチンの政策を、メドヴェージェフになつてやると示した」という論調でした。プーチンの在任中にはやらなかった大規模な軍事パレードを、なぜメドヴェージェフになつてから赤の広場でやったのか。

加えて私が仰天したのは、それまでは軍事パレードとはいえ大型爆撃機がクレムリンの上空を飛ぶことはなかったのに、メドヴェージェフがそれをやったことです。大型爆撃機が編隊を組んでクレムリンの上を飛んで行きましたが、これはメドヴェージェフの軍に対するメッセージです。「私は軍を知らないが、軽視することはないからよろしく」ということではないでしょうか。

そこまでする前に、「ロシアが軍事大国を誇示」という報道は、とんでもない間違いだと思えます。明確に、ロシア国内で不満を持つかもしれない勢力に対するメッセージだったのでした。

物事の本質を見極める素直な目

ですから、新聞をお読みになるのは大

いに結構ですが、その時に素直な気持ちになつていただきたいというのが、私の今日のメッセージです。

つまりは、「新聞が伝えるように悪い人物が、なぜ国民の熱烈な支持を集めるのか」ということまで説明して伝えていただかないと、報道の意味がないからです。

私はよく「それで食べているのです」と笑うのですが、講演を依頼される時に「新聞を読んでもよく分からないから、分かるように話してくれ」と言われます。これは、新聞にとつても不幸です。ですが、新聞もNHKもそんなに急に変われるものではありませんから、皆さんにとつて大切なのは、素直な気持ちで物事を見ることだと思います。

なぜ目付きの悪いプーチンが国民から人気なのか、ということを知ろうとする。でも、彼は決して目付きが悪いわけではないのです。真剣になつていると、ちよつと目付きが悪くなる。でも、本の中にも写真を載せたように、彼はいい顔をしているんですよ。

ロシアを嫌いでも、それは仕方ありません。確かに北方領土も返していないし、1945年に日ソ中立条約を侵して満州に攻め入り、何万人もの同胞が犠牲になつたことを考えれば、好きになれという方が無理かもしれません。好きにならなくてもいいけれど、それでもロシアは

強力な大国です。そして、マーケットとしても資源供給国としても、また文化の殿堂としてのロシアの役割も、「嫌いだから知らない」では、日本人の損です。

そうならないように、素直な気持ちで、疑問があつたら調べるといふふうにしていただければ、ちよつと嫌な言い方になります。日本の隣国として、ロシアをうまく使えるのではないかと思います。

今日は、質問がたくさんあると思います。話していいこともたくさんあります。ですので、何でも聞いてください。

質疑応答

ーロシアでは、幼い子どもの時から軍人になるべく教育をしているとのことですが。

小林

ああ、やはりNHKの影響は大きいですね。3回にわたつてNHKスベシャルで「プーチンのロシア」を放送しました。あの番組の主旨は、プーチンが悪者だということ。子どもを軍人にしようとしているということですが、日本もかつては陸軍幼年学校などで若者への軍事教育をやつていましたよね。

ロシアが今やろうとしているのは、軍の近代化です。それはプロとしての軍人を養成し、軍全体を小さくしてエリートに任せようというものです。ですから、軍

事大国として子どもの頃から攻撃的な性格を養うという意味ではありません。

それと、シリーズの3回目にグルジアの戦いが取り上げられました。去年の8月7日、北京オリンピック開会式の日にはグルジアが南オセチアに攻撃を仕掛け、それに対してメドヴェージェフとプーチンの指示で軍が大攻撃をかけて、南オセチアだけでなく西の端にあるアブハジアの独立も承認してしまいました。

また地図で見てください。グルジアの隣にある南オセチアは、ロシアのパスポートを持つ人たちが住む小さな地域です。そこにグルジアが攻撃を仕掛け、その8時間後にロシア軍が攻勢をかけて、南オセチアの独立を承認してしまいました。もうひとつ、鼻先にアブハジアというところがあり、首都はスフミといつて温暖な気候でみかんが成るような良いところですが、ここの独立も承認してしまつたのです。

番組は、戦争が起こつたことでグルジア人の家族が離散したことをテーマにしています。ご主人はモスクワに残り、奥さんは夏休みでグルジアに帰つていたために離ればなれになつてしまつた、ということでした。ところがこれは、ものすごくデイスインフォメーションなのです。

この番組の主旨は、家族が離散してしまつて一緒になれない、そんなことをやつたプーチンはけしからん、ということ

すが、そこにはとんでもないウソがある。本当にその人が帰りたいと思えば、実は簡単に帰れるのです。なぜか。ウクライナに入り、経由すれば自由に問題なくグルジアに入れる。ロシアから直接、飛行機で帰ろうと思うと無理ですが、隣国のウクライナを経由すればいい。本当に、これだけは許せないと思うのですが、NHKがディスインフォメーションをやっている。さすがにこれはいけない。話としては涙が出てくるような話です。子どもはお父さんに会いたい。ところが、それからお父さんは汽車に乗って帰ればいいというのだから、ひどい話です。

私は、そんなことになってしまった経緯を自分なりに調べてみました。ドキュメンタリーを作るのは、非常に難しいのです。なぜかというところ、「こういう番組を作ろう」と案を考へても、実際に取材現場に行くとは話は違いますが、軌道修正をしなければならぬ。それがドキュメントです。

ところが、軌道修正をするのはものすごく難しい。頭の中で既に「離散家族がかわいそうだ、プーチンはひどい」とできているストーリーを、「でもウクライナを経由して列車でグルジアに帰ればすぐ会える」となったら、番組が成立しません。最近はこのような手法がテレビ番組ですごく多くなっている。

ドキュメンタリーにまつわる話をもうひ

とつ付け加えます。6月に「日本エッセイストクラブ賞」の授賞式があり、私はその審査員をやりました。今年の受賞者は、池谷薫君という私と一緒に番組を作った人物です。「人間の顔を撮る」というドキュメントで、彼の作品には中国を這いずり回って撮った「蟻の兵隊」など劇場で上映されたものもあります。彼は本当に辺鄙なところに行つて、ずっと1年半くらい取材をして番組を作る。それを彼がエッセイに書いて、私が強力に推薦して今回の受賞になったわけです。それがなぜこんなにうれしいかというと、授賞式の講評でも言うつもりですが、「ドキュメンタリー本来の姿をやるようにしている」ということです。彼は現場に取材に行き、話が違つたらちゃんと修正して本当のドキュメントを作っているという人物だからなのです。

それに比べると、あのNHKの3本は本当にイージーです。モスクワ支局で働いているロシア人スタッフも「小林さんがいたら、あんなものは作らせない」と言つたというのですから。しかし、私が全部に目を通すことはできないし、そもそも退職した者が、ああだこうだと言うのは嫌がられるでしょう。

話が横道に逸れてしまいました。言いたいのは、見るのは結構ですがその時には少し疑問を持つて見てほしいということです。NHKが伝えるからといって、全

てが真実だと考えないで下さい。それは、朝日新聞の報道でも日経でも同じことです。メディアに携わる人間には、完全な人間は少ないくらいなのですから。

ー今日はありがとうございます。小林先生は、一般の日本人が見るのはまた別の視点でロシアを見た方が良く、ということをお話下さつたのだと思います。ローマの歴史を見ても、ローマから見る歴史と、例えばカルタゴから見ると違ふことと同じだと思ひました。ロシアもある一点から見るのではなく、多方面から見た方がいいというご指摘だと思います。

ーここでひとつ質問があります。5月12日に司会をなさつたプーチン首相のスピーチですが、おそらくは国際ルールでロシアの方が訳した文書が正式な訳となつていると思ひます。その中でプーチン首相が、話しているロシア語の訳について、疑問に思ひましたので伺ひます。

小林

その時のロシア語をそのまま訳してみましようか。「世界全体を愛する」ということは非常に簡単だ。でも隣国を愛しよう」ということだと思ひます。

ーありがとうございます。当日の訳では、「世界を愛するのは簡単でも、隣

国を愛することは難しい」とされておりました。それが少し違ふのではないかと思つていたので。

小林

それはどちらに力点があるかということでしょうね。難しいという意味でもあるでしょう。

僕はあの時、「あれ、ウクライナとかバルト海諸国のことを言っているのかな」と思ひましたが、日本に来て言っているのですから、そうではないでしょう。すると、「仲良くしようよ」ということだと思ひます。

ー「世界平和のためには、もっともつとロシアと日本は仲良くしよう」というプーチンからのメッセージだと受け取つたのですが、それでいいでしょうか。

小林

いいと思ひます。ただ、裏を返せば本音のところでは、「隣国を愛するのは難しいのだよ」ということでもあると思ひます。

通訳はものすごく難しいのです。だから私は絶対にやらないのです。間違えろと大変だからです。必ず専門家を使ひます。

あとひとつだけ、ラトビアのリガで私が腰を抜かしてきた話をします。ロシアとラトビアを含めたバルト海諸国の間には、

現在、問題が多くなつてきています。リガはラトビアの首都ですが、その一番良いところに、「占領博物館」というのがあります。これは、ロシアが占領していた悪者だという主旨の博物館です。ただ、ロシアから見れば「一緒にナチスと戦つたじゃないか」ということでもある。1940年にヒトラーとスターリンの密約でリガはソビエト連邦に併合されたわけですが、それから独立するまでの占領の時代を表した博物館です。

ロシアはそれに反発していますが、私は入つてびっくりしました。入り口の一番目立つところに天皇・皇后両陛下の肖像があり、そこにお二人のサインがある。

係争のある問題については両方の側から見なければならぬと思いますが、この問題においては、明快に日本政府がラトビア側に立ったということです。

私はそれでよく分かりましたが、去年の7月にラヴロフ外相がロシアの外相として初めて北方領土を視察しました。それが天皇・皇后両陛下の訪問の後なのです。ですから、あれはやつてはいけないことです。誰も行かないような博物館だからいいけれど、そもそも天皇・皇后両陛下をあのよう政治的なところに使つては絶対にいけません。外務省でもぜひ話題にしてくださいということです。

― 天皇・皇后両陛下は戦争の問題に真

剣で、バルト三国のどこに行つてもそういうところを訪問されたという事実があります。

小林

沖繩もそうですよね。ただし、リガの場合は「占領博物館」という名前なので。そこに両陛下が署名された肖像が飾られているのは、非常に残念でした。さて、時間もだいぶ過ぎたようです。放送ではこんなに超過することはないのですが、すみません(笑)。
本日はどうもありがとうございました。